

近世瀬戸内地域の新田開発にみる出稼ぎ労働

森下 徹

A Study of Migrant Workers Engaged in Reclamation Construction in the Seto Inland Sea Region
in the Early Modern Times

MORISHITA Toru

はじめに

- ①石垣の請負と石船
- ②土方の請負と砂船
- ③作業現場での労働編成

おわりに

【論文構図】

萩藩領の瀬戸内沿岸部では、近世後期にかけてもさかんに新田開発（開作）が行なわれていた。その普請にかかわった労働力については以前検討を加えたことがあり、瀬戸内一帯を移動する請負人とそれに率いられた石船、そして現地で普請を管轄する石頭という業者との組み合わせからなっていたことをのべたことがある。本論は、石垣とセッタだった土手の普請もあわせて取り上げ、開作普請における労働の特質を再考しようとするものである。開作の周囲を取り囲む堤は、石垣と土手の二重構造からなつており、それぞれを石船（石組）と砂船という、出稼ぎ集団が担当していた。また普請全体を管轄するものとして石頭があり、その下で多数の丁場を一括する請負人がいた。ただし長さ二〇間単位に分割された個々の丁場に即すると、在所を同じくする数艘の石船ないし砂船の出稼ぎ集団が造成作業にあたっていた。石垣ばかりか土手につ

いてもそうした専門集団が担当していた理由として、数人規模で達成するという、造成現場における作業の共同性があげられる。すなわち仕様を理解し資材を揃え、作業の計画を立て現場で指揮をする、こうした統括者に率いられた集団でなければならなかつた。あわせて水中で行う作業だったこともあって、統括者と一体化した機動性も不可欠なものだった。個々の作業自体をバラバラにみると、石を組み上げる、あるいは土で土手を作つてゆくという、熟練度は低位で互換可能なようみえたとしても、集団としての組織性が必須であり、そのことが普請現場での労働編成や調達の仕方を規定していくとできるわけである。

【キーワード】新田開発、瀬戸内地域、石船、労働の共同性、出稼ぎ集団